

Paranik erka

MIZUHO SHINOHARA

2020 年 12 月 14 日

目次

I	はじめに	3
II	言語システム	5
第 1 章	音韻・音声	6
1.1	パラニーク・エルカの書記と発声	6
1.2	母音・子音	6
1.3	促音・撥音	7
1.4	アクセント	7
1.5	書記と発声の細則	7
第 2 章	形態論	9
2.1	状態詞	9
2.2	供与詞	10
2.3	名詞	11
2.4	動詞	11
2.5	形容詞	12
2.6	副詞	12
2.7	疑問詞	13
第 3 章	統語論（一般）	14
3.1	文の語順	14
3.2	否定文 es-	15
3.3	疑問文 aus-	15

3.4	命令文 zis・sis	16
3.5	繫辞 asi	16
3.6	存在 ari	17
第 4 章	統語論（状態詞・供与詞）	18
4.1	供与詞の解決	18
4.2	品詞による意味の変化	18
4.3	状態詞の解決	19
III	附録	20
Appendix A	文法の補足	21
A.1	主たる語の省略	21
A.2	状態詞・供与詞の語順	21
A.3	約物の表記	22
A.4	借用語の表現	22
A.5	日本語への転記	23
A.6	複合語の形成	23

第Ⅰ部

はじめに

そんなものはない

第Ⅱ部

言語システム

第 1 章

音韻・音声

1.1 パラニーク・エルカの書記と発声

パラニーク・エルカの書記はアルファベット (*Arfabeta*) による。このテキストでの書記はアルファベットのうちラテン文字によるが、音韻（音声）と表記が一对一对応が取れるものであれば他の文字（例：キリル文字）によってもよい。

音韻は表 1.1・表 1.2・表 1.3 のとおりである。表 1.3 は拗音（「ラッパ」「リットル」など）である。拗音は必ず *-h-* という接中辞がある。

1.2 母音・子音

表 1.1 パラニーク・エルカでの母音

	前舌	後舌
狭	i[i]	u[u]
半狭	e[e]	o[o]
広	a[a]	

表 1.2 パラニーク・エルカでの子音

	両唇音		舌頂音		舌背音		声門音
破裂音	p[p]	v[b]	t[t]	d[d]	k[k]	g[g]	
鼻音	m[m]		n[n]				
ふるえ音			r[r]				
摩擦音			s[s]	z[z]			h[h]

表 1.3 パラニーク・エルカでの子音（拗音）

th[tʰ]	zh[dʒ]	rh[rʲ]	sh[ç]	f[ɸ]
ph[pʲ]	vh[bʲ]	kh[kʲ]	gh[gʲ]	mh[mʲ]
nh[ɲ]				

1.3 促音・撥音

子音を重ねると促音になる。例えば *rakka* のとき発音は /ra.kɾa/ になる。また、撥音に *n[n̩]* が存在する。

1.4 アクセント

1.5 書記と発声の細則

1.5.1 語の接続による発音の区切り

状態詞・供与詞の接続などにより子音と母音が一続きになる（例：*sis-* + *asteri*）ときは ' で接続部を区切る（例：*sis'asteri*）。

1.5.2 子音そのものの発音

例えば子音 K や子音 M そのものを発音する（英語で言う「エー、ビー、シー……」）ときは大文字は接尾辞 *-a*（例：「K」は *Ka*）、小文字は接尾辞 *-ea*（例：「k」は *kea*）を子音につけて発音する。

第 2 章

形態論

2.1 状態詞

状態詞（略記：mod^{*1}）は語の状態を示すものであり、必ず子音で終わる形で表記される。状態詞は語の前につく（例. *esnisri* 「会わない」）。

表 2.1 はよく使われる状態詞の一覧である。

表 2.1 主な状態詞の表

語	意味	用例	意味
ek	過去形	<i>ekpasri.</i>	「奏でた」
ak	未来形	<i>aksenzi.</i>	「変わるだろう」
niz	～している	<i>nizmesri.</i>	「待っている」
zis	～しなさい	<i>zisnekri!</i>	「離れなさい！」
sis	～しよう	<i>sisvanti!</i>	「行こう！」

^{*1} 英訳 *Modifier* の略。

2.1.1 数・性・相・態・時制の表現

2.2 供与詞

供与詞（略記：sup^{*2}）語と語の関係を示すものである（詳細は統語論で扱う）。供与詞は語の後につく（例：sarik ne.「貴方を思う」）。供与詞には特定の接尾辞がつかない。

複数の供与詞を一つの語に修飾することは可能でありごく一般的に行われる（例・「……『を』 ～ 『に』」 → -k-zek）。適当な順番で修飾していけばよいが、このとき供与詞と供与詞の間に -a- が挿入される（例：-kazek）。

表 2.2 はよく使われる供与詞の一覧である。

表 2.2 主な供与詞の表

語	意味	用例	意味
k	～は	Nasik ni.	「私は探す」
s	～を	Pasris astera.	「夢を奏でる」
nik	～の	Fairanik vismike	「赤い世界」

2.2.1 供与詞で使われる用語

供与詞周辺の処理は複雑であるので、以下のように用語を定める。なお、例文として *Sarik ne.*（意味：「私は思う」）を使用する。

- 供与詞が語に付くことを「**修飾（する）**」という。
例文の供与詞 *k* は動詞 *sari* を修飾している。
- 供与詞から見て修飾された語を「**接受語**」という。
例文の動詞 *sari* は 供与詞 *k* の接受語である。
- 語に供与詞がついていることを「（語が供与詞を）**持つ**」という。
例文の動詞 *sari* は供与詞 *k* を持っている。
- 供与詞が取る語を「**項**」という。
例文の代名詞 *ne* は供与詞 *k* の項である。

*2 英訳 *Supplier* の略。

- 供与詞を適切に処理して意味を確定させることを「**解決する**」という。
例文はもっとも左側かつ唯一の供与詞である *k* が名詞 *ne* を項に取ることで解決する。

2.2.2 格の表現

2.2.3 接続詞

2.3 名詞

名詞は接尾辞 **-a** がついた形で表される。ただし一部の代名詞 (*ni* や *ne* など) は **-a** で終わらない。

2.3.1 人称代名詞

人称代名詞は一人称、二人称、三人称の 3 つが存在する。

数・性は一般的に状態詞で表現される一方で、表 2.3 のような代名詞には語形変化による数の表現が存在する。例えば「私」の場合、*ni* は単数であるが *nis* になると複数になる。

表 2.3 主要な代名詞の一覧

語	意味
<i>ni(s)</i>	私
<i>ne(s)</i>	君
<i>na(s)</i>	これ
<i>sa(s)</i>	それ
<i>ma(s)</i>	あれ

2.3.2 所有代名詞

2.4 動詞

動詞は語幹に接尾辞 **-i** がついた形で表される。

2.4.1 動詞の転用

すべての動詞は必ず**名詞の形を持つ**。また一部の動詞は形容詞・副詞の形も持つ。動詞が名詞や形容詞、副詞になることを**転用**という。

名詞に転用された動詞は動名詞とは異なり、意味合いも記述上の形態も異なる。動詞を名詞に転用して、供与詞 *nik* など項に取った場合は名詞の意味で解決される。転用せずそのまま項に取った場合は動名詞（V すること）または単純な修飾（V する何々）として意味で解決される。

動詞が形容詞に転用された例

nirkanik **nekra**.
「**遠い**光」

動詞がそのまま *nik* の項になる例

nirkanik **nekri**.
「**遠のく**光」

2.5 形容詞

形容詞は接尾辞 **-e** がついた形で表される。これは動詞が転用によって形容詞化したものも含む。このうち **名詞**を修飾する供与詞 *nik* の項となっているものが正確な意味での形容詞である。

なお、動詞を修飾する形容詞は副詞として扱われる。

2.6 副詞

副詞は形容詞が**動詞**を修飾する供与詞 *nik* によって付加されたものである。

形容詞のうち動詞に掛かるものが副詞となり、名詞に掛かるものは形容詞のままとなる。

名詞に形容詞が修飾された例

pasranik vanse.
「**悲しい****演奏**」

動詞に形容詞が修飾された例

pasrinik vanse.

「悲しく奏でる」

2.7 疑問詞

第 3 章

統語論（一般）

3.1 文の語順

基本的な語順は VSO である。供与詞による表現に置き換えると *Vkas* である。

3.1.1 動詞のみ（V）

例

Veiri. 「起きる」

Vanti. 「行く」

3.1.2 動詞と主語（VS）

例

Tantik parva. 「塵が残る」

Fekrik ne. 「貴方が近づく」

3.1.3 動詞と主語と目的語 (VSO)

例

Parikas ni *paranik erka*. 「私は『パラニーク・エルカ』を話す。」

Nasrikas ni varda. 「私は真実を聞く」

3.1.4 動詞と目的語 (VO)

供与詞 *k* がない場合、何が主語になるかは文脈に依存する。

例

Esrikaris vestera. 「物事を思い出せない」

Sisnasis ferissa. 「花を探しましょう」

3.2 否定文 *es-*

否定文は平叙文の適当な語に状態詞 *es* を修飾して表現する。もっとも *es* は単語の極性を反転するのに使われることもある。

否定文の例

Esrikarizak eszisrikari ni.

「(私は) 思い出せないし、思い出したくもない。」

3.3 疑問文 *aus-*

疑問文は平叙文の文頭に状態詞 *aus* を修飾して表現する。

「はい」か「いいえ」で答えられる文はこの状態詞を修飾するだけでよい。一方で疑問の対象がある場合は対象に応じた疑問代名詞を適当な供与詞で示す。

どちらの疑問文においても文末に「？」を置くことは必須ではない。

疑問文の例 —

Ausrikarik ne?

「(貴方は) 思い出せる？」

3.4 命令文 *zis*・*sis*

命令文は文頭に状態詞 *zis* ないし *sis* を修飾して表現する。

zis と *sis* の違いはその要求の強さの程度にある。*zis* は強い表現であり、例えば上司が部下に命令するといった状況が考えられる。*sis* は弱い表現であり、例えば友人間の緩い誘いや要求に用いられる。

疑問文(強勢)の例 —

Zisnaviririk mirke!

「三回繰り返せ！」

疑問文(弱勢)の例 —

Sisnestrikas ne zaranik vismike!

「(貴方は) 赤いお花を探してきて！」

3.5 繫辞 *asi*

例えば「A は B だ」のような A と B の等価表現を実現するには動詞 *asi* を用いる。A に対しては供与詞 *k* を用い B に対しては供与詞 *s* を用いる。

A または B が自明である場合(例えば *Ais ni.* とすれば「(それをしたのは・それは) 私だ」となる)はそれぞれの供与詞とその項を省略しても構わない。

単純な「A は B である」の例 —

Asikas ne ritmike.

「貴方は白い」

3.6 存在 ari

例えば「A がいる（存在する）」のような存在表現を実現するには動詞 *ari* を用いる。A に対しては供与詞 *k* を用いる。

単純な「A がある」の例

Arik ninik nasarissa.

「調査員の私がいる」

第 4 章

統語論（状態詞・供与詞）

4.1 供与詞の解決

供与詞は語と語の関係を示す。格（例：～が・～を・～に、など）・文の接続は供与詞で処理する。供与詞は後に続く項（動詞句・名詞句を含む）を供与詞の並びに応じて、**右から順に、常に一つだけ取る**。

動詞句・名詞句は複数語から構成されうるが、供与詞は句を一つの塊としか見ず語単位で解釈することはしない。例えば「美しい花」という名詞句があるとき供与詞は「美しい花」という塊として見る。これを「美しい」と「花」と分解して「美しい」だけを項に取ることではない。

4.2 品詞による意味の変化

一部の供与詞、特に *nik* は接受語の品詞（動詞か名詞）によって項の意味を変える。

例えば、項が形容詞として接受語が動詞だと、形容詞である項を副詞として処理する。一方で接受語が名詞であれば項は形容詞のままで扱う。

整理すると以下のようなになる。

- A=名詞・B=形容詞
→ B は形容詞のままである。
- A=動詞・B=形容詞
→ B が副詞化する。

4.3 状態詞の解決

状態詞はその語の状態を示す。文法事項のうち、数・性・相・態・時制は状態詞によって示される。

状態詞は一切の項を持たないため、解決は供与詞より簡単である。状態詞は常に修飾している語と一対一で対応する。よって意味を考えるとときは状態詞の意味をその語に足すだけでよい。

第Ⅲ部

附録

Appendix A

文法の補足

A.1 主たる語の省略

原則として文を成り立たせるときは名詞ないし動詞で始めなければならない。しかし、例えば「花を！」のように供与詞で始めなければならない文や供与詞のうち接続詞的役割を果たすものはその例外となる。

供与詞から文を始めるとき、その供与詞に母音が存在しないときは *a-* を付加する。それ以外はそのまま表記する。例えば「花を！」（供与詞から始まる文）は *As ferissa!* となり、「しかし、我々は立ち上がった」（接続詞から始まる文は） *Ned ekveirik nis.* となる。

A.2 状態詞・供与詞の語順

状態詞・供与詞はどのように並び替えても良い。しかし、推奨される順序は以下の通りである。数字が若いほど優先度が高い。

A.2.1 状態詞の語順

- | | |
|-----------------------------|-------------------------------|
| 1. 接続 <i>sed · ned · ad</i> | 5. 態・相 <i>rit · sit · niz</i> |
| 2. 疑問文宣言 <i>aus</i> | 6. 法 <i>fis · sis · zis</i> |
| 3. 数 <i>nos · dos · nas</i> | 7. 時制 <i>ak · ek</i> |
| 4. 性 <i>ar · er · nir</i> | 8. 否定 <i>es · ves</i> |

A.2.2 供与詞の語順

1. 主格 *k*

2. 対格 *s*

3. 奪格 *ruz*

4. 与格 *zek*
5. 随伴 *vei · nei*

6. ここに示されない供与詞

7. 疑問詞の項

8. 接続 *ren · den*

A.3 約物の表記

表 A.1 がパラニーク・エルカの記述上の役物として用いられる。

表 A.1 パラニーク・エルカの約物の一覧

役物	範囲	意味
.	文の終わり	文の終了記号。
,	文の区切り	文を列挙する時や副文の結合記号。
!	文の終わり	文の強調を明示的に示す記号。
?	文の終わり	疑問文の終わりを明示的に示す記号。
«»	文の前後	会話・文章を引用・強調するための記号。
'	適当な箇所	発音の区切りを定める記号。

A.4 借用語の表現

パラニーク・エルカは原則として借用語に対して音韻論・形態論からの逸脱を認めない。よって外国語からパラニーク・エルカに語を借用するとき、以下のような方法が考えられる。

- 音韻論に沿って綴りを書き換える。
例：「L」はパラニークエルカに存在しないので「R」に置き換えるなど。
- 形態論的な一致を行う。
例：名詞を借用するときは語尾を何らかの形で *-a* にするなど。
- 翻訳借用（カルク）は [appendix A.6](#) に準拠して行う。

A.5 日本語への転記

発音規則は概ね日本語と共通しているので、発音する通りに日本語（仮名など）に転記すればよい。

パラニーク・エルカから日本語への転記例

Aikas Paranik Erka nirkaz foska.

「あいかす ばらにーく えるか にるかず ふおすか」

「パラニーク・エルカは光であり力である」

A.6 複合語の形成